海上自衛隊幹部学校ＳＳＧコラム２３５　2022/6/14

ドイツ製日本軍艦「八雲」の数奇な運命

－　バルト海からの回航・祖国ドイツ海軍との戦闘・復員業務　－

令和４年５月27日、過去２年中止されていた記念艦三笠での日本海海戦記念式典が３年ぶりに実施された。その席上、横須賀地方総監　乾悦久は、「三笠は老朽化が進み、改修、整備の必要な箇所が増えている。保存会と協力し、保存整備に努めていきたい」と今後の三笠維持管理における懸案を述べたが[1]、イギリスで建造され日本の軍艦として日本海海戦を戦った三笠は、日英交流の象徴としての史料として、また、当時の技術や産業の様子を伝える産業遺産の一つとして、懸案を克服し後世に伝えていくことが求められている。

当時の主力艦の多くは、イギリス製であったが、一部にはフランスやドイツで建造された艦があった。なかでもドイツで建造された「八雲」に着目することは、当時の欧州諸国と我が国との関係や日本海海戦との関連から意義を有する。

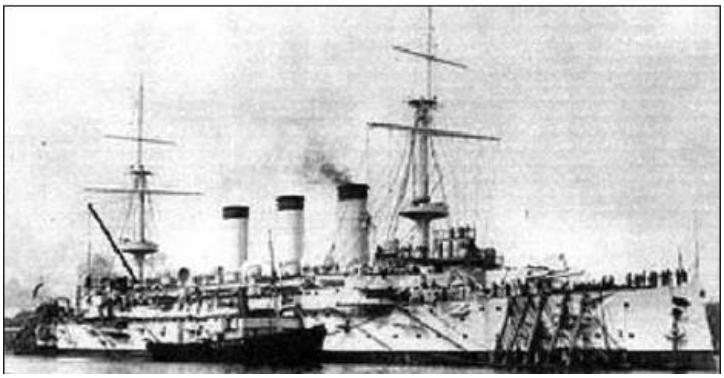


図１：ドイツ国内の造船所における八雲[2]

イギリスやフランスからの回航は、ヨーロッパ西部からの回航であるのに対し、八雲はドイツにあっても東寄りのバルト海に面した造船所からの回航であったことから、日本海海戦約５年前に帝国海軍は、バルチック艦隊のうちスエズ運河を経由した支隊に近いルートでの航海を経験していたことを意味する。

そして、八雲は、日露戦争を経た第一次世界大戦においては、祖国ドイツ海軍との戦闘に従事し、第二次大戦中も警備艦兼練習艦として軍籍にあり、戦後の復員業務に従事後、解体という約45年の生涯を全うする。本稿においては、八雲のバルト海からの回航から論を進め、その後、同艦のたどった数奇な運命を紹介する。

---

[1] 「日本海海戦１１７周年、記念艦「三笠」で式典　両軍の戦死者悼む　ウクライナに思い重ねて」『神奈川新聞』2022年５月28日。

[2] Dietrich Mevius, “Ein Schiff und seine Zeit Panzerkreuzer „Yakumo,“” Amtsblatt Löcknitz-Penkun, Nr. 04/2010,p.14.

八雲の建造とバルト海からの回航

八雲は、ドイツのステッテン（現在はポーランド領）にあったヴルカン造船所で、明治31(1898)年2月26日に起工、翌7月7日進水、艤装と各種試験を終えた明治33年6月20日、日本海軍に引き渡された。この造船所で建造された著名な艦艇としては、定遠、鎮衷があり、鎮衷を日清戦争で鹵獲したことによる運用を通じて、帝国海軍は八雲発注以前にその建造技術を認識していたことになる。

八雲がイギリスではなくドイツに発注されていることには、産業革命により、世界最大の工業国であったイギリスに対して、新興の工業国ドイツの台頭を象徴付けるものである。1872年以降、ドイツは海外に植民地を求め、海軍の派遣を行っているが、アフリカや太平洋の植民地への派遣、警備には多数のコルベット、フリゲイトが充てられた。すなわち海軍の主力を強力かつ高速の巡洋艦ととらえ、これによる通商破壊戦を主任務とするものであり[3]、太平洋を含めた海域での巡洋艦の活動を重視していたドイツに巡洋艦を発注することには、一定の合理性があった。

しかしながら、竣工時点での日独関係というものは、友好一色ではなく、微妙な関係性であった。当時のドイツ皇帝ヴィルヘルム二世は、既にいわゆる黄禍論を唱えており、発展著しいアジアの新興国としての日本は、欧州全般で警戒されていた。

また、八雲起工の前年にあたる1897年11月、東アジアに駐留するドイツ海軍の軍艦三隻は宣教師殺害事件を口実に山東半島南岸の膠州湾を占領した。翌月、本国から派遣された増援部隊を加えドイツ海軍唯一の在外艦隊である「アジア巡洋艦隊」が編成されているように[4]、八雲起工時点で、中国大陸におけるドイツの利権や海軍の存在は、安全保障上の懸案事項となりつつあった。

さらには、八雲の竣工と時をほぼ同じくして、中国（清）で生起した北清事変（義和団の乱）によって、ドイツのケッテレル駐清公使が殺害されたことにより、ドイツ皇帝は、激越の演説を行うことで、七千の兵の北京への動員を命じており[5]、事態終結後の列国間での交渉の趨勢に伴う極東における日独関係をはじめとする欧米諸国との関係性が懸念される情勢にあった。外務省は、ドイツとの好誼を図るべく竣工に際して当時のドイツ皇帝ヴィルヘルム二世の行幸を要望、結果的には雨天により取りやめられたが、艦長以下数名が拝謁、叙勲された[6]。

このような背景で竣工した八雲の回航員には、委員長（艦長予定）として東郷正路大佐、副長予定に加藤定吉中佐、航海長予定として千坂智次郎少佐が指定された[7]。

---

[3] 青木栄一『シーパワーの世界史 ② 』出版協同社、1983 年、310 -311 頁。
[4] 大井知範「越境する海軍と二〇世紀初頭の帝国秩序―ドイツ海軍から見た東アジアの共存体制―」『国際政治』2018 巻 (2018) 191 号、49-50 頁。
[5] 鹿島守之助『日本外交史第５巻　支那における列強の角逐』鹿島平和研究所、1970 年、182 頁。
[6] JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.C06091255000、獨逸国皇帝軍艦八雲臨幸に関する件（防衛省防衛研究所）
[7] JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.C11081502700、軍艦八雲回航に関する件（２）（防衛省防衛研究所）

バルト海からの回航に関しては、航海長であった千坂とその部下による詳細な報告書が現存する[8]。

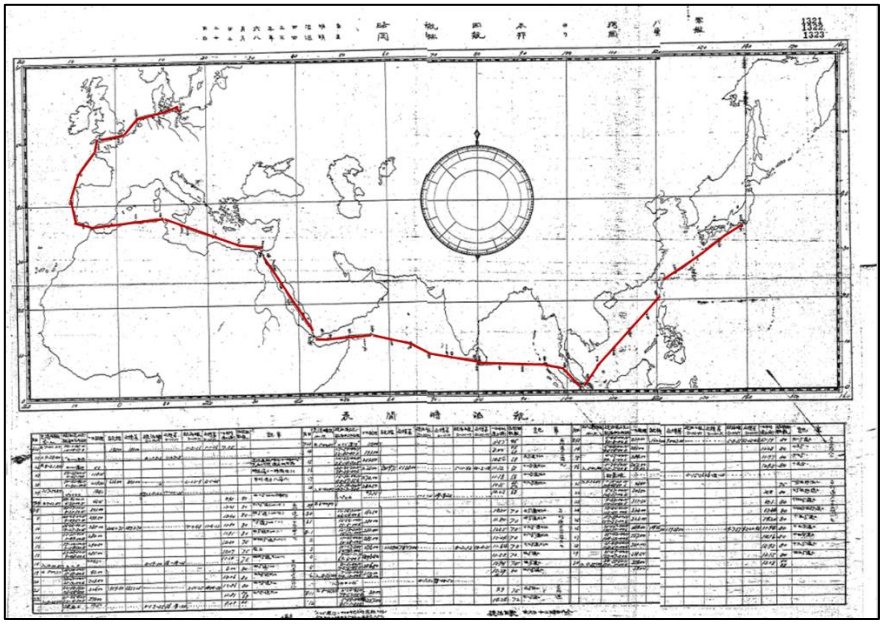


図２：八雲獨国ヨリ本邦航路略図[9]

八雲の回航は、バルチック艦隊のうちスエズ運河を経由した支隊の航路に共通する要素があり、帝国海軍は、日本海海戦の４年前にその航路を体感していたこととなる。単艦での回航であった八雲の航海に対して、バルチック艦隊は、艦隊を編成し警戒や訓練を継続しながらの航海であり、さらには日英同盟による英国の妨害による行動上の懸案という難度の高いものであったが、元来、英国からの回航を経験した将兵は多く、欧州からの回航による体験の素地に加えて八雲回航の知見によりバルチック艦隊の行動を想像し、日本海到着時点での艦隊の現況や士気を想像する素材となり得たことで、八雲回航の経験は、後年の日本海海戦との関連から歴史的意義を有する。

イギリスからの回航に対して、航程は約 600NM の差であるが、より気温及び水温の低いバルト海から北海を縦断して地中海、スエズ運河を経て中東に至る航路は、回航の中盤における海域との気温差という点で人員に対しても機器に対しても負荷は、一層大きくなる。

バルト海から北海への航海は、ユトランド半島北端を大きく迂回したバルチック艦隊とは異なり、当時は皇帝の名を冠したカイザーウィルヘルム運河と呼ばれた現在のキール運河を通航している。通航に際しては、ドイツの水先案内人の操艦により、約 13 時間をかけてエルベ河口側に到着した。

---

[8] JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.C11081502700、軍艦八雲回航に関する件（２）（防衛省防衛研究所）

[9] 同上、筆者により一部着色。

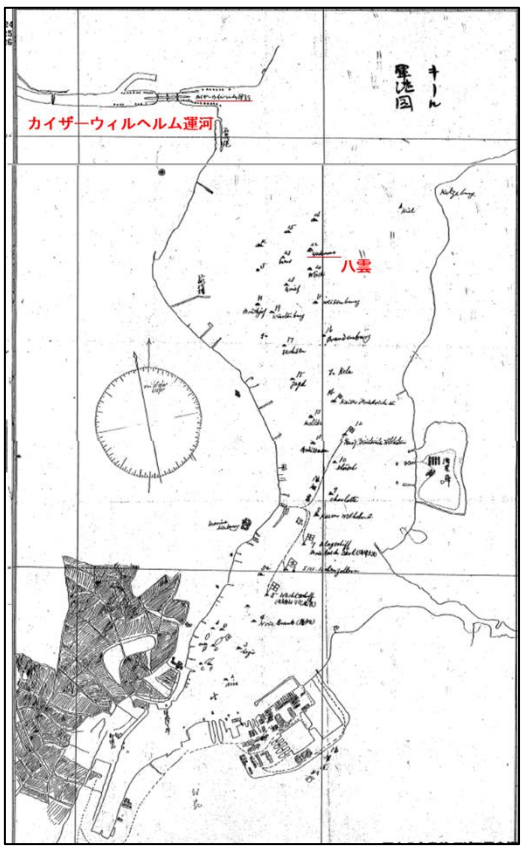


図３：キール軍港図[10]

この報告書は、当時の海軍主要幹部が目を通し、バルト海からの回航の概要や航路上の要所、気象海象を認識した。また、この回航の記録は、市販もされており[11]、広く海運関係者に読まれたと同時に海軍軍人にも自己研鑽の素材として購入された可能性がある。

また、回航委員長であった東郷正路は、日露戦争開戦直前に海軍兵学校長を務めており、山本五十六（当時高野姓）をはじめとする日本海海戦を戦った初級士官、候補生を送り出しているが、その体験談や記録は、在任中に生徒に教育したことが想像に難くない。

さらには、この回航に従事した主要幹部は日本海海戦を東郷艦長は、第六戦隊司令官、加藤副長は春日艦長と連合艦隊内で一定の発言力を有する配置で迎えることとなった。

これらにより、日本海海戦時の海軍士官は、バルト海からの回航を想像し得る要素を潜在的に有していたと考えられる。

八雲自身は、日露戦争においては、黄海海戦、旅順港閉塞作戦及び日本海海戦に従事した。なかでも日本海海戦にあっては、命中弾により戦死者二名があったものの、初日にはバルチック艦隊主力艦に命中弾を与えるとともに翌日の敵主力艦数隻を他艦との包囲によ

---

[10] 前掲「軍艦八雲回航に関する件（２）」筆者により一部加筆。
[11] 千坂智次郎『軍艦八雲自独国至英国航海報告』水路部、1901 年。

り降伏させ、生存者を救助する等の活躍があった[12]。これらの活躍により、他の主力艦とともに軍港都市舞鶴の道路に「八雲通り」と命名される等、国民にもその名を広く知られる存在となっていった。

祖国ドイツ海軍との戦闘（第一次世界大戦）

日露戦争により、ドイツ海軍は日本を一目置くべき海軍国であり、高度に訓練され、士気も高く、最新技術を見事に使いこなす能力を持っていると認識するようになった[13]。

このように日独海軍間の実力差が縮小し、条件次第では逆転しつつある中で、1914 年 6 月 28 日のオーストリア皇太子暗殺事件は、一か月後の 7 月 28 日には、オーストリアとセルビアに戦火を点じ、8 月 1 日のドイツのロシアへの宣戦となり、さらに 8 月 4 日のイギリスの対独宣戦布告により、大隈内閣は、井上馨による著名な「今回欧州の大禍乱は、日本国運の発展に対する大正新時代の天祐にして、日本国は直に挙国一致の団結を以て、此天祐を享受せざるべからず[14]」の評価とともに参戦を決定することとなる。

つまり、大正の天祐とは、欧州の動乱によって生じた極東への欧米の関心低下がもたらす「力の真空」であり、日本にとりドイツ勢力を東洋から一掃する好機であった[15]。

八雲は、青島攻略を命ぜられた第二艦隊に所属し、回航時の副長であった加藤定吉の指揮下で、8 月 23 日、祖国ドイツとの戦争を迎えることとなった。

開戦を見越して膠州湾に進出していた八雲には、第二艦隊司令長官から哨区が指定され、ドイツ海軍に対する海上封鎖作戦に従事した。27 日には、青島の南、塔連島のドイツ灯台の占拠と通信所の設置が命ぜられ、乗員により構成された陸戦隊の派出によって占領した[16]。

9 月 28 日には、要塞を攻略する陸軍部隊の掩護として、イルチス山砲台右肩山頂に対し、合計 50 発の間接射撃を実施、観測にあたった利根からの通報によれば、弾着の一部は不明であるものの、道路をまたいでの弾着は敵に対する心理的効果があったと認められることや八雲の弾着に呼応しての友軍陸軍部隊と思われる発砲があり、一定の効果が認められるとされた[17]。

青島攻略の後半においては、佐世保からの輸送船舶護衛に従事したが、青島から離脱していたドイツ巡洋艦エムデン(SMS Emden)がインド洋方面に向け行動中の情報などによる

---

[12] 「練習艦隊濠洲訪問の件（２）」JACAR（アジア歴史資料センターRef.C04016213700、公文備考 艦船６ 巻６９（防衛省防衛研究所）

[13] ベルトホルド・ザンダー＝ナガシマ「日露戦争とドイツ帝国海軍－ パーセプション・教訓・露呈したジレンマー」『平成 16 年度戦争史研究国際フォーラム報告書』防衛研究所、2005 年、85 頁。

[14] 歴史学研究会編『日本史史料』４近代、岩波書店、2000 年 315 頁。

[15] 平間洋一『第一次世界大戦と日本海軍 : 外交と軍事との連接』慶應義塾大学出版会, 1998 年、18-19 頁。

[16] JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.C10080168800、軍艦八雲戦時日誌　大正３年８月分（防衛省防衛研究所）

[17] 「軍艦八雲戦時日誌　大正３年９月分」JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.C10080168900、軍艦筑波　八雲　戦時日誌（防衛省防衛研究所）

戦域拡大があり、英国海軍と共同で対応すべくシンガポールに進出し、警備活動に従事した[18]。大戦末期でのシンガポールにおける上位指揮官は、回航時の航海長であった千坂智次郎となり、この時期のシンガポールでは、流行性感冒（いわゆるスペイン風邪）の感染拡大があったが、八雲にあっては、感染者もなく帰国した[19]。

戦間期

その後は、装備の旧式化により遠洋航海への従事などの任務が主となったが、大正12(1923)年には関東大震災における救護活動に従事しており[20]、艦の旧式化に伴う任務の多様化にあって縦横な活躍をしている。

昭和12(1937)年の重巡洋艦「足柄」のドイツ訪問に際しては、ドイツ海軍長官(Oberbefehlshaber der Kriegsmarine) レーダー(Erich Raeder)から米内海軍大臣宛にドイツ人画家ハンス・ボールト（Hans Bohrdt）による海戦画が寄贈されているが、ボールトからの提供として1898年の八雲進水式昼食会における同画家による八雲の絵を表紙としたメニューすなわち約40年前のものが同封された[21]。

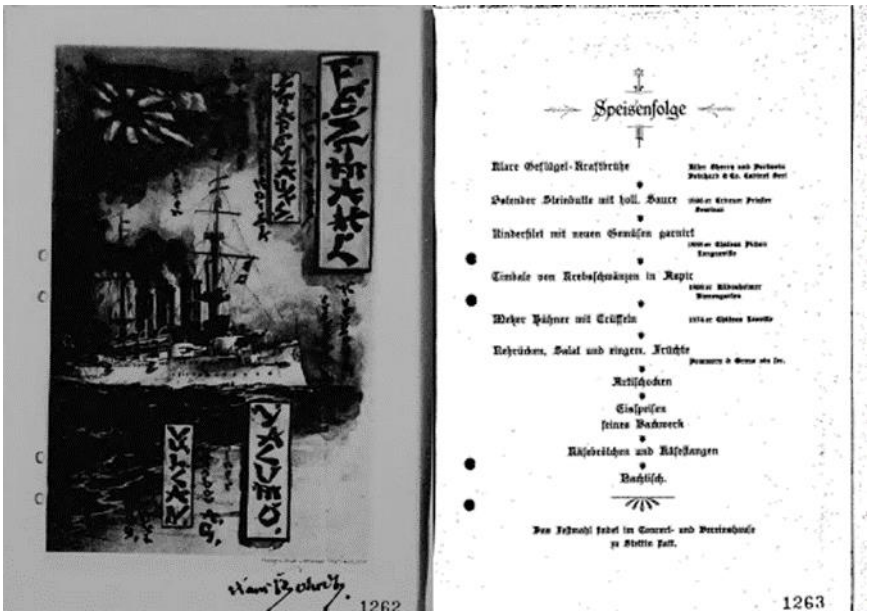


図４：八雲進水式昼食会におけるメニュー

---

18 「JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.C10080169000、軍艦八雲戦時日誌　大正３年１０月分（防衛省防衛研究所）」

19 「戦時日誌（軍艦八雲）　大正７年１０月１日～１３日」JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.C10080418600、大正６～７年　軍艦八雲戦時日誌（防衛省防衛研究所）

20 前掲「練習艦隊濠洲訪問の件（２）」

21 「独海普第５５号　１２．７．２２　ハンス．ボールド画伯経歴の件」JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.C05110875500、公文備考 昭和１２年 Ｆ 艦船 巻３（防衛省防衛研究所）

第二次世界大戦・復員業務

第二次世界大戦期には、八雲の老朽化は進んでいたが、呉鎮守府所属の練習艦兼警備艦として軍籍にあり、新型の練習巡洋艦「香取」、「鹿島」の実任務への投入や戦争激化に伴う海軍兵学校生徒の採用数拡大等の練習艦としての任務増大に対応した。同時期の就役艦艇として、「出雲」及び「磐手」が同様の運用をされながらも呉空襲によって大きな被害を受けていたのに対し、八雲は、呉空襲での被害も軽微であり、航行可能な状態であったことから 45 年を越える艦歴最後の任務として復員業務に従事することとなる[22]。

主として中国大陸からの復員業務に従事し[23]、任務終了後の 1947 年、舞鶴の自身の名を冠した通りと対岸の造船所において解体された。

以上、八雲の数奇な運命をドイツでの竣工、回航から日露戦争、第一次世界大戦、関東大震災、第二次世界大戦そして復員業務の順に振り返ったが、近代日本が歩んだ歴史上の重要な出来事の多くに長期にわたり関与し続けているという点で、艦艇としては稀有な存在である。しかしながら、後年の祖国ドイツとの関係、交流という点では、足柄訪独時に進水式に用いられた絵が託されたこと以外には、現存する記録上、特筆すべき点は見出せない。このことは、長期にわたる縦横な活躍によって、ドイツ製という出自そのものが意識されなくなったことにもよるものと考えられる。

黎明期の軍事面での日独交流は、日本陸軍がドイツ陸軍に範をとったことを中心に語られがちであることに対し、この時期の海軍面での交流も人的には、伏見宮博恭王のドイツ海軍兵学校留学、山本権兵衛のドイツ艦艇での航海実習などが存在する[24]。八雲の生い立ちやその後の祖国ドイツ海軍との戦闘は、これらの事例と合わせて、日独交流の文脈で評価されるべき事例であり、このような視点からの検討を継続して深めていく。

****

（海上自衛隊幹部学校　戦史統率研究室　本名　龍児）

（本コラムに示す見解は、海上自衛隊幹部学校における研究の一環として執筆者個人が発表したものであり、防衛省・海上自衛隊の見解を表すものではありません。）

---

[22] JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.C08011345200、軍艦八雲引渡目録（昭和２０年１０月５日現在）（防衛省防衛研究所）

[23] JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.C15010093100、終連報丙第２３号　昭和２１年２月１２日　渉外課　支那方面就航中及予定艦艇名一覧（防衛省防衛研究所）

[24] 在京ドイツ大使館編「日独交流 160 年展」在京ドイツ大使館、2021 年, www.germanyinjapan160.com.